



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.135  
2014.12.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

40

### 「私の行く先は? 県教委文化財担当指導主事に (S43) 45 1968) 70」

県教委埋文担当の林茂樹先生が焦ったのは何時始まるか分からない中央道用地内遺跡調査でした。調査体制のための人材確保で調査員としての大卒の若手を五人先ず抑えた。調査主任として私が選ばれた。43年3月阿南第一中学校富草部校は本校への統合で無くなる事なり、3年生を卒業させた私は中央道遺跡発掘調査主任として転出が決まった。さて引越しをとなつて私の行く先が決まらなかった。最初の調査は下伊那から始まるから飯田教育事務所といわれていたが、用地買収が進まず調査が何時始められるか分からないという。もう学校は人事が終わっていて私の入る余地は無い。林先生は椎間板ヘルニアで入院中。連絡の無いままやきもきしていた。何日かたつて決まったのは県教委でした。あわてて荷造りし長野市に引越した。

県教委社会教育課文化財係に、係長は郷土史家の関川千代丸さん、係員に民俗学者の浅川欽一さん、林先生と高卒の書記がいたが、私を指導する林先生は入院中で何をしても良いのか分からない日々を幾日か過ごす。書類は届く、記録を見ると8日に弥生が丘高校へ発見届けを返戻・岡谷市稲荷平遺跡発掘届けを課内とある。其々に表紙(原義)をつけて処理するが、その書き方も分からず書記に教えてもらい書くが、自分の下手で汚い字の書類が係りや課内を回って各自が印鑑を押す。書記から先生の癖にとからかわれたりしての書類作成が何とも苦手だった。病院に林先生を訪ねて指導を受けたりして過ごす。前年の遺跡分布調査の会計検査院の監査が入り、整っていない書類やカードに手古摺り、カードは一昨年のカードを用意し、入ったばかりで何も知らないとの一点張りて終えた。とにかく県庁務めは大変だった。教育長から辞令を貰うが、高校のときの数学教師の態度2・理解4と可愛いがってくれた伊澤集治先生で時々教育長室に呼ばれコーヒーを御馳走になった。辛かったのは背広ネクタイと革靴が窮屈でした。それだけに外に出かける分布調査が一番の楽しみでした。

分布調査は開発予定地で、企画部・農政部・企業局等の開発計画や地教委からの要請、私の希望も含めて計画した。43年10地区290遺跡、44年19地区565遺跡。県内の市町村のうち13市18町20村計

51市町村で、地区別は東信13北信8中信16南信14となり、全県下を歩いた。私にとっては未知の地区・新発見の遺跡と遺物・新しく親しくなった各地区の研究者等との出会いがあつて、学校現場での教師では体験できない私には最高の経験で大きな財産にもなった。



▲私の歩いた市町村(下線)

其々の分布調査に思いは残っているが、心に強く残っているのは最初の調査であった霧ヶ峰高原地区である。企業局から早急にと要請されたピーナスラインの用地内遺跡調査で、入院先の林先生の指導を受けながら計画の作成と実施協力依頼を出して6月12日に実施する。これが保護運動のキッカケとなつてこの年の県内10大ニュースの一つになった。こうした現地協議・保護措置については次号で触れたい。もう一つは私が行きたくて計画した栄村秋山地区の調査で、秋山の民俗調査をされている浅川さんの案内で歩いた。古い面影を残していた秋山の現状や、夜屋敷地区の山田松吉さん宅での二十三夜講のめったに体験できない行事に見学できたのを思い出す。

職権乱用と言われるかもしれないが、分布調査で確認した遺跡の再調査が二つある。一つは和田村ヘイゴロゴウ遺跡。山裾が土取り場と聞いて部分的に崩すと黒曜石ヤリを中心とした旧石器が幾つもある。長さ20cmと長大な石ヤリに注目された。もう一つは小谷村林頭遺跡で押型土器と磨石斧の採集を見て調査すると立野式土器の竪穴住居址を検出する。私自身が驚喜した調査でした。便宜を図つたのは木曾の仲間が開田高原で自分たちが発見した有舌尖頭器の遺跡小馬背・西又Ⅱ両遺跡の発掘調査をしたいという。木曾の分布調査を計画し調査員日当を調査費に当てた。どちらも成果を得る事が出来仲間が喜んだ。

※巻頭連載は隔月です。次回は 鈴木正博さんの新連載がスタートします。

## 目次

■田舎考古学人回想誌 私の行く先は? 県教委文化財担当指導主事に 神村 透 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト(第128回) 五十嵐祐介 …3
■考古学の履歴書 過ぎし日の軌跡-女として考古学研究者として-(第3回) 岡田淳子 …2	■考古学者の書棚 「無文字社会の考古学」 西野吉論 …4

## 考古学の履歴書

## 過ぎし日の軌跡 —女として考古学研究者として—(第3回) 岡田 淳子

## ③時代の流れ—先縄文研究

「岩宿」が縄文時代以前の文化として認識されてから、明大考古学研究室には各地の地元研究者から、先縄文遺跡の情報もたらされるようになっていた。そして、幸いにも私たち学生は、幾つもの遺跡の発掘を体験して、縄文以前の文化を学んだのであった。

その頃、地質学研究団体のひとつ「第4紀研究会」が週末ごとに「関東ローム」の巡検を行っていた。芹沢長介さんに誘われて、私もこの巡検に何度か参加した。戦時中の工兵用の「小円匙(エルピ)」を古道具屋で手に入れ、縄跳びの縄を結んで肩にかけ、頭にマフラーを巻く、これが私の巡検スタイルだった。草の無い時期にしか崖の観察は出来ない。早春まで地質学の人々が「三色アイス」と呼ぶ3つの色を識別できる火山灰層を追って、多摩川流域を歩いた。武蔵野段丘、立川段丘、青柳段丘とそれに伴うロームの年代が確認されたのはその頃の成果である。芹沢さんはその時から「女性には遺物の量が少ない旧石器時代の研究が向いている」と言われていた。明大の学部時代、発掘に参加した旧中石器時代の遺跡には、生涯忘れられないものが幾つもある。

その一つは青森県津軽・金木町の「藤枝溜池々畔」、NHKラジオの取材で賑々しく報じられたが、それは旧石器ではなく自然に出来た石器様の石であった。芹沢さんは毎晩、学生の求めに応じて石器製作の講話をし、私たち学生は石器と自然石の違いについてとことん学んだ。この二者は一点に力が加わって剥離することでは同じである。包含層とした土層から発見されたものと、砂利を運び軌道に敷かれた小石の中から発見されたものが、全く同じで、私たちは観念した。二つの違いは一体どこで見分ければよいのだろうか。それは、力を加えた痕が連続しているか否かによって、見分けられるのだと知った。

調査主任の杉原荘介先生は、ご苦労の末、「金木の偽石器」として結末をつけられた。ここでは幾つかの事件があった。一つは私たち、アルコールをたしなまない学生が、先生より先に食事をしたことが発端になったものである。宿舎の「斜陽館」の方たちが、先生と地域の方たちとの食前酒があまり長いので、先に食べるようにと気を利かせてくださったのだが、それは通用しなかった。常識のある後輩思いの大塚初重助手が取りなしてくださったのに、それが油を注ぐような形になり、先生は激怒した。私は女子部屋に引き上げたが、その後が大変だったと聞いている。もう一つは、杉原先生の旗じるし「小円匙」が無いという事件である。器材係で、いつの間にか責任者の

ようになっていた私は、直ぐに藤枝溜池まで走って戻った。長距離走には自信があり、日暮れまでには戻れると確信して走ったのだ。円ピは、湖岸段丘の崖の前ですぐに見つかり、後から追いついた戸沢光則さんと美しい夕焼けの中を宿舎に戻って何事も無く終わったのだが、それでは済ま



▲右：芹沢長介さん、左：江坂輝弥さん  
(1952～3年頃、芹沢さんからいただいた写真)

なかった。なぜ女子学生を一人で行かせたのかと、その時も先生は大声を出されたとか、皆さんに大きな迷惑をかけてしまった。

群馬県の「武井遺跡」は、打製の尖頭形石器を出す遺跡だった。トレンチを1.5mほど掘り下げ、ポイントとともにこぶし大の円礫を数多く発見した。岩宿遺跡と地域も近くて、岩宿の後に来る文化層の遺跡として編年に期待がもたれた。発見者の相沢忠洋さんは、毎朝ヘルシーで美味しい納豆を差し入れてくださり、発掘労働のエネルギー補給に役立った。

このとき私は困ったことに直面した。というのはこの地域では当時まだ男女混浴で、若かった私は到底その浴場に入ることができなかった。心温かい先輩たちは、背中を向けて人垣を作ってあげるからと提案してくれたけれど、それでも私は入れない。発掘は汗をかく。耐え切れなくなった私は宿舎の女性に尋ねて、街の銭湯まで行くことにした。作業が終わってすぐに出かけたけれど、帰って来ると食事はすでに終わっていて、私の分だけが食卓に残っている。そして、岡本勇さんのきれいな字で「蕎麦食べて背長くなれ」と書いてあった。その気持ちが嬉しくて、涙でお蕎麦の味が変わっていたのを覚えている。

さらに、日本で最も高い位置にある駅、長野県の野辺山駅の近くで「矢出川遺跡」を発掘した。この遺跡は地元の研究者、由井さんが発見し、明大考古の学生研究会が発掘したもので、専攻生たちがこぞって参加した。この時、同級生の中村斎さんが作詞作曲して考古学音頭を作った。「円ピを握る両の手は、世界をつなぐ同じ手だ、ソレ！ 同じ手だ」「青い月夜のトレンチで、花咲く恋の美しさ、ソレ！ 美しさ」まだまだ続く。

考古学音頭はその後、発掘の度に、また学生の集会の度に歌い続けられた。

矢出川遺跡は、約20mm×5mmの細石刃を主とする細石器の遺跡で、円錐形の細石核を伴っている。遺物は浅いところで発見され、遺構は見つからなかった。

ここでも一つ事件が起こった。12月の寒さのなか、発掘を始める前に焚火をして指先を温める。ある朝、その焚火が燃え広がった。近くに建物は無いが一面の枯草が一気に燃え上り、男性達は厚い上着を脱いで火をたたいた。消える気配がない。力の無い私は、50mくらい先の草の少ないところに目をつけ、枯草を鎌で薙ぎ払った。火はその辺りで消え、その夜、雪が降ってニュースにならずに済んだ。

それから50年ほど経った数年前、野辺山へ出かけたとき、発掘の記念碑が建っているのを見つけたが、そこは手入れの行き届いた畑になっていた。

## 略歴

1932年	東京府豊多摩郡代々幡町(現渋谷区初台)に生まれる
1949年	東京都立第五高等女学校 卒(学制改正)
1950年	東京都立富士高等学校 卒
1955年	明治大学文学部史学地理学科(考古学) 卒
1958年	東京大学大学院生物系研究科(人類学)修士修了
1961年	明治大学大学院文学研究科(史学)博士単位取得
1961～64年	東京都立武蔵野郷土館学芸員(常勤臨時職員)
1964～66年	米国ウィスコンシン大学人類学部 研究員
1967～77年	国立(クニタチ)音楽大学 専任教員
1978～88年	北海道大学理学部・文学部 専任教員
1988～2004年	北海道東海大学国際文化学部 専任教員(1998年より特任)
2010年～現在	北海道立北方民族博物館 館長(非常勤)

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。



## Jレーエッセイ

## マイ・フェイバレット・サイト 128

## 脇本城跡 ～秋田県男鹿市～

五十嵐 祐介

大河ドラマやアニメなどによって、戦国武将や城などが世代や性別を問わず注目されている。「歴女」という用語も一時期話題を呼んだことも記憶に新しい。

私が携わっている脇本城跡は、多くの方には正直に言ってそこまで認知されている城ではないし、そこに居城した武将も、どちらかというとなりやな部類の人物にあたるかもしれない。その城の名は「脇本城跡」、そして城主は「安東愛季（ちかすえ）」。現在の秋田県の礎を築いた重要な人物で、脇本城跡は中世秋田地方支配の拠点的山城であった。

脇本城跡は、男鹿市脇本の日本海に突き出た生鼻崎という丘陵上にある。日本海と旧八郎潟（現在の大潟村）の海運、さらに城内の主要部に「天下道」と呼ばれる主要道路が貫通しており、海上交通に加え、陸上交通の要所であった場所である。日本海に面する丘陵南側は第三紀の大露頭となっており、地質学研究における重要なフィールドにもなっている。



▲海上からみた大露頭と脇本城跡

城跡は従来あった城を天正5（1577）年に秋田安東氏の支配拠点として改修されたと考えている。面積は150haにも及ぶ広大な城跡で、曲輪や土塁、井戸跡など中世末期の遺構が良く残されており、関連する寺社や城下町などもその魅力の一つとなっている。そのため平成16年には史跡指定を受けた。



▲脇本城跡内館地区

平成13年度以降進められてきた確認調査においては、青磁、白磁、染付等の貿易陶磁に加え、越前や珠洲などの国産陶器、金属製品や木製品など多くの遺物が出土した。中でも染付は、明代だけでなく、元代のものも確認され、日本列島の北限ともなっており注目されている。



▲元代染付長頸

遺跡の価値は非常に高いにも関わらず、多くの人にそこまで認知がないと書いたのは、私を含めた担当者の力量不足が、主たる原因であることは否めない。この機会に多くの方々に認知していただければ幸いである。

ところで、『男鹿半島・大潟ジオパーク』をご存知でしょうか。ジオパークという名称は聞いたことがあるでしょうか。文化財担当として採用された私は縁あって、今はこのジオパークという事業を本務としている。ジオパークとは、ユネスコが支援するプログラムで、地球科学的に価値の高い地質や地形を保護・保全し、その地質や地形の上に成り立つ、歴史や文化、自然、食などを通して、地域の持続可能な活性化を目的とする仕組みである。ここで紹介した「脇本城跡」も『男鹿半島・大潟ジオパーク』を構成する大きな資産の一つとして位置づけている。



▲男鹿半島・大潟ジオパークロゴ

史跡の保全や活動にも今後新たな視点を融合していくことが求められていることを感じており、使えるものは何でも使うというのが、私の学んできた考古学の良いところだ。ジオパークと文化財の橋渡しとなるのが今の私の大きな課題の一つである。地球のダイナミックな活動により隆起や沈降を繰り返した丘陵に、城が築かれ、そこを現代の我々が史跡として活用を図る。そこには地球と人との壮大な物語が隠されている。遺跡の価値を向上させ、遺跡を知る新たな切り口の一つになるのではないだろうか。

さて、史跡の確認調査では平成25（2013）年に『脇本城跡一総括報告書一』を刊行し、史跡指定10周年となる平成26（2014）年には『史跡脇本城跡整備基本計画書』もまとめた。今後は史跡整備へ向けた具体的な動きを進めていくこととなる。脇本城跡は昭和62（1987）年から地元の方々を中心に「脇本城址懇話会」が結成され、環境整備や日頃の活動などにおいて、多大な協力を頂戴している。地元の方々に愛されての脇本城跡だと私自身考えており、その意味で地元の理解が厚い遺跡だ。そういうこともあり懇話会の方々と一緒に、脇本城の未来を考える史跡指定10周年記念事業も開催する運びとなっている。地元と一体となって、今後も末永く未来に伝え、郷土の誇るべき歴史遺産としての脇本城跡となるよう、責務を全うしていく所存である。



▲史跡指定10周年記念事業チラシ

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは新海和広さんです。

## 考古学者の書棚

## 「無文字社会の考古学」

安齋正人／六一書房(1990)

西野 吉論

私が学んだ大学では、旧石器時代について学ぶことのできる授業は無く、また、昭和40年代以降の学史や、型式学の研究方法について触られることもなかった。そのため、当時、大学に勤務されていた野崎欽五氏が勉強会を開催してくださり、一年かけて型式学の学史と方法を学んでいくことができた。今から振り返ると、勉強会に参加したというだけで考古学を勉強した気になって浮かれていたのであろう。先輩の須原拓氏が、これ読んだか?と見せてくださったのが本書である。そこには「方法と理論」について書かれていた。足りていない部分を見抜き、必要な本を教えることができるというのはすばらしいことだと感じた。

本書の構成は以下の通りである。

## I 進化論と先史学

- 1 ダーウィニズムと古典的進化主義者の時代
- 2 進化論の没落の時代
- 3 総合説と《ニューアーケオロジー》の時代
- 4 分子遺伝学と先史学の新しい方向
- 5 進化論と日本先史学

## II プロセスとシステム

- 1 《ニューアーケオロジー》とプロセス学派
- 2 ビンフォードの方法と理論
- 3 《ニューアーケオロジー》と日本考古学

## III 民族誌と考古学

- 1 狩猟採集民の復権
- 2 エスノアーケオロジーの方法と対象
- 3 エスノアーケオロジーの研究成果
- 4 エスノアーケオロジーと日本考古学

## IV 生態学と考古学

- 1 生態学の研究史
- 2 生態人類学と考古学

- 3 生態学的アプローチの主要な概念
- 4 生業活動の季節的なスケジュール
- 5 遺跡の領域と活動圏

## V 唯物史観と旧石器時代

- 1 唯物史観への新しい取り組み
- 2 先史時代の交換・交易網
- 3 後期旧石器時代革命
- 4 ナイフ形石器文化の時代

## VI ゴードン・チャイルドと社会考古学

- 1 戦前の仕事
- 2 戦後の仕事

## VII 渡辺仁と生態考古学

- 1 黒曜石と連続割裂技術の研究
- 2 アイヌの生態系
- 3 土俗考古学
- 4 進化と生態
- 5 『ヒトはなぜ立ちあがったか』

この本を読み返すと、考古学の授業で最初に学んだ、「考古学とは歴史学であり、考古学的資料を分析・検討して、当時の経済・社会・文化などの歴史を復原する学問である」という目的を達成する方法は、諸先輩方がいなければ全く身につかなかったとしみじみ感じる。勉強会や先輩からのアドバイスがなければ、現在、私は大学で非常勤講師として学生に授業する機会をいただくことなどとてもできなかったと、本当に感謝する次第である。そして、本書に書かれていることでもあるが、考古学に興味を持ち、入門書や概説書の次の段階を学ぼうとする方に、ぜひとも手にとっていただきたい一冊であると思い、内容には触れなかったが、ここで紹介させていただきます。

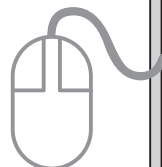
www.aruka.co.jp

## 弊社HPリニューアル中のお知らせ

弊社ではアルカ通信について、HPでバックナンバーを読んでいただけるよう、只今リニューアル工事を進めております。

お見苦しい状態ではございますが、  
何卒今しばらくお待ちいただけますよう  
お願い申し上げます。

(株)アルカ

アルカ通信  
No.135

発行日 2014年12月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行所 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801  
長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp  
URL : http://www.aruka.co.jp